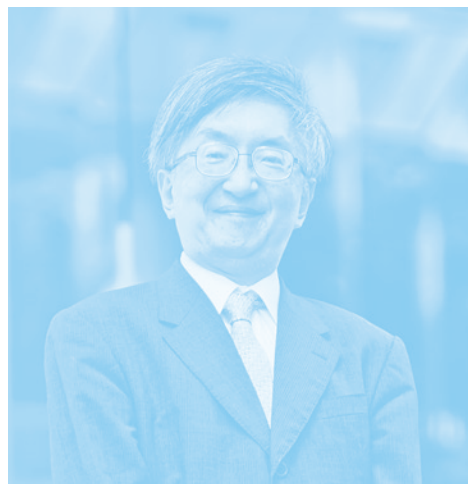


Newsletter 42

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第42号/2023年5月15日発行

Contents

- 巻頭言 教養研究センター所長就任のご挨拶
- 特集Ⅰ 「基盤研究」「最終講義」「学習相談」
- 特集Ⅱ 「教養研究センター選書」「読書会」
- 特集Ⅲ 【教養研究センター 設置科目／実験授業】
アカデミック・スキルズ／身体知・音楽／生命の教養学／ゲーム学／
実験授業「スポーツ・インテグリティ」
- 特集Ⅳ 「創造力とコミュニティ研究会」「日吉行事企画委員会(HAPP)企画」
- 特集Ⅴ 「情報の教養学」「研究の現場から」
- 活動予定
- 私の〇〇自慢



教養研究センター片山杜秀新所長

教養研究センター所長就任のご挨拶

教養研究センター所長
片山杜秀 (法学部)
Morihide Katayama

教養とは何か。繰り返されてきた問いかけです。なぜ繰り返されるのか。答えがないからでしょう。あるいは答えが時代に応じて変わってしまうからでしょう。近代とは、人間を取り巻く諸環境の変化の速度が極端に上がって行く頃合いと定義できるかもしれませんが、21世紀には諸々がますます急いできているようにも思われます。それに伴って教養のイメージも変異をくりかえし、もうついに究極のステージに立たされつつあるのではないかと。そんな気がしてなりません。

唐突ですが、フランクリンは「人間とは道具を作る動物である」と定義したでしょう。丸腰の徒手空拳でしか振る舞えなかった生き物が、棍棒や刃物を持って狩猟採集を覚える。なぜ、そんなことをするか。よりよく生きるためでしょう。棍棒も刃物もなければ、肉を食べたいつもりが、逆に食べられてしまうでしょうから。それでは困るので道具を作る。生身だけではできないこと、難しいことを、やりやすくしてゆく。鋤や鍬を作って農耕を始め、工場を建てて工具を鍛えて工業を盛んにする。火力や水力からついに原子力の味まで覚えて、百人力、千人力、万馬力、億馬力をわがものにし、肉体労働を機械労働に置換してやまない。労働者は肉体労働者から知的労働者へと化けてゆく。

余暇も社交も増える。社交の際には無知無教養だと馬鹿にされたくない。もちろん知的労働の場では、頭を複雑に駆使することも求められるだろう。無知無教養では務まらない。そういう常識が共有されていた時代が近代産業文明のひとつの黄金期でしょう。教養も大手を振って歩いていました。

ところが、そんなおめでたい教養の時代は遠くなり、今はいよいよその先に来ております。人間の歴史とは「道具を作る」ことによって、労働を生身そのものから生身でない道具に外部委託していつている歴史とすれば、委託の度合いが加速度的に進んでいるのが21世紀でありましょう。単純労働も知的労働も、人工知能とロボットが組み合わされば向かうところ敵なし。遠隔地から自動兵器を操作して戦争もできてしまう。ルーマニアでは政府の閣僚に人工知能を加えるとの報道も聞きました。株式市場も債券市場もAIが仕切っているのでしょうか。生身の人間もサイボーグになってAIやロボットに追いつこうとするかもしれませんが、費用や効率を考えると、そんな面倒なことにとってもお金をかけきれものではありません。人間要らずの時代が目前というわけです。

でもやはりそれは本末転倒でしょう。人間は道具を自らがよりよく生きるために開発し運用してきたはず。人間が要らないことには決してならない。人間とは何か。なぜいるのか。そこを見定めて、人間要らずの世の勢いに流されない力の源となるのが、この時代の教養だと思います。教養なければ人類滅ぶ。ちょっと大げさでした。



基盤研究

教養研究講演会 no.7「キリスト教は『世界』をどう取り戻すか—救済宗教のakosmismを越えて」

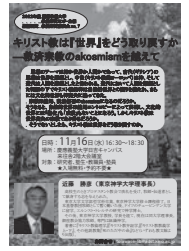
【講師】 近藤勝彦（東京神学大学理事長）

【企画・司会】 小菅隼人（慶應義塾大学理工学部教授）

教養研究会第7回目は、東京神学大学理事長、キリスト教組織神学の第一人者の近藤勝彦先生に講演をお願いしました。来場者は24名で、学部生、大学院生のほか、日吉と三田の教員の参加もあり、とても活発な議論が行われました。近藤先生が専門とする「組織神学」とは、旧約聖書や新約聖書の研究、あるいは聖書考古学や教会法とは異なり、現代のキリスト教会がどういう信仰を歩んでいるか、そして、どういう信仰を歩むべきか、という問題を扱い、倫理学、弁証学、教義学の三分野があります。その内、この講演では、近藤先生は教義学の立場から、「キリスト教は

『世界』をどう取り戻すか—救済宗教のakosmismを越えて」というタイトルで、救済に焦点をあてられました。これは、21世紀の現代キリスト教の最も重要なテーマであり、とりわけ、コロナ禍やウクライナ戦争が続いている今日、私たちが考えるべき喫緊の課題と言えます。近藤先生は、「世界」を原理とした古典古代、「神」を原理とした西洋中世に対して、「人間」を原理とした近代においては、自然的世界も文化的世界も神喪失に陥る可能性を指摘し、その上で、キリスト教においてはどのように世界を取り戻すかという主旨で講演をしてくださいました。現代の教養教育に欠けることの多い「宗教」を学問的立場から論じる方法を示してくださいました講演会でした。

（小菅隼人）



経済学部 不破有理教授 最終講義

2023年2月8日、不破有理教授の最終講義が教養研究センター主催で開催されました。不破先生は、日吉の教養研究センター副所長を2年間（2008年～2010年）、所長を4年間（2010年～2014年）お務めになり、在任中に、「日吉学」など学術領域を横断する先駆的な試みを立案・企画運営され、「スタディ・スキルズ」（アカデミック・スキルズに改称）やアーサー王ワークショップ等、義塾の研究と教育実践の融合に多大なる貢献をされました。最終講義の会場である来往舎シンポジウムスペースには、不破先生を慕う教職員および学生が約100名集まり、オンラインでも170名を超える方々が視聴されました。

演題は「『アーサー王伝説に魅せられて』～研究と教育

と～」で、先生のアーサー王との出会いを起点に、アーサー王がどのような形でサブカルチャーの英雄となったかを考察されました。そして、アルフレッド・テニソンの「シャーロットの女」を分析しつつ、夏目漱石が日本初のアーサー王物語「薙露行」に込めた意図を解説して、時間・空間・学問領域が交錯する展開をもはや楽しみながら、アーサー王伝説の魅力余すところなく語られました。和やかな雰囲気の中にも知的好奇心を刺激する新たな着眼点が示され、参加者の想像力を大いに掻き立てる「場」が繰り広げられました。

（永井容子）



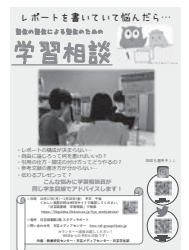
学習相談

対面授業が主流に戻り、相談者の数も一昨年、去年と徐々に回復してきました。秋学期は特に、テーマの決め方と引用方法についての相談が目立ちました。春学期でレポートの体裁には慣れてきたものの秋学期はよりオリジナリティの高いものを目指したい熱意や、研究マナーに対する意識など、相談者の成長を感じました。学習相談員としては、同じ学生としての立場から自身の経験を思い出しながら一緒に解決方法を探っていった他、時には学習相談記録や連絡帳を通して学習相談員同士で知識を共有し合うこ

ともありました。また、秋学期はInstagramの定期的な投稿や、2022年12月12日～1月20日に行われた展示「学習相談員に聞いてみた：学習お役立ち情報、教えます」など、「学生目線」を押し出した周知活動を行いました。来年度も引き続き積極的な情報発信を続け、困った時に気軽に相談できる窓口としてより多くの学生に認知してもらえるような場を目指したいです。

（杉岡由貴 法学部法律学科 4年）

※学年は2022年度時



教養研究センター選書23

「アーサー王物語」に憑かれた人々——19世紀英国の印刷出版文化と読者——

アーサー王伝説の集大成といわれるトマス・マロリーの『アーサー王の死』は1485年にイングランド初の印刷業者ウィリアム・キャクストンによって上梓されます。テューダー朝には5回印刷されるものの、18世紀に出版されることはありませんでした。ところが、19世紀の初頭になると『アーサー王の死』に憑かれた人々が続々と現れ、出版競争が始まります。1816年にウォーカー版とウィルクス版が、1817年にはサウジー版が立て続けに登場。なぜ3版がほぼ同時に出版されたのか、という疑問を解くべく、書物を眺め、未刊行資料と長年格闘してきました。

本書では19世紀のベストセラー作家ウォルター・スコットと後の桂冠詩人ロバート・サウジーの競り合いを第一幕とし、次に1816年ポケット版刊行をめぐる争う出版界の悲喜劇を第二幕で扱いました。はたしてウォーカー版は先

発ウィルクス版を追い越して出版できるのか、実験書誌学とでもいべき手法で書物の判型を探り当て、印刷工程から印刷所要時間を割り出しました。算術の世界です。本邦初の試みの「推理」をご一緒にどうぞ。第三幕では厳しい道徳観が支配的であった英国ヴィクトリア朝において、いかに出版界は道ならぬ恋を描く『アーサー王の死』を「編集」したのか。時代の無言の要請によって編集されたグロブ版（1868年）はロングセラーとなります。マロリーの『アーサー王の死』は多様な編集を受けながらも、その物語の面白さと心に響く人間ドラマゆえに、現代まで読み継がれているのです。そのテキストを編集し、印刷し、出版した人々の舞台裏に光をあてました。アーサー王伝承の一角を担った人々の物語を楽しんでいただければ幸いです。（不破有理）

《2023年度教養研究センター選書 原稿募集》

教養研究センターでは、2003年度以来「教養研究センター選書」を刊行しております。この企画は、当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投げ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。

■応募資格 教養研究センター所員（共同執筆も可）

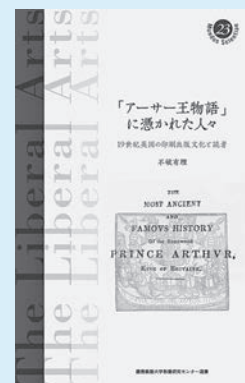
■内容 研究分野は問わない。学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的な研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供するもの。

■申込締切日(予定)：2023年8月31日(木)

■原稿提出締切日(予定)：2023年9月29日(金)

●詳細は別途所員宛にご案内しました募集要項をご確認ください。

※締切日につきましては変更になる可能性があります。



読書会「晴読雨読」

「村上春樹を読む」

村上春樹の小説を取り上げるこの読書会では、春学期の村上の最初の3作の話し合いに引き続き、秋学期も村上の次の2作、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)と『ノルウェイの森』(1987年)を取り上げました。これらは長編小説であり、作品を読む時間を確保するため、会の間隔を長く取りました。毎回25人ぐらいの学生が集まり、講演と質疑応答を行いました。質疑応答では理工学部の小菅隼人先生にサポートしていただき、2回にわたって楽しい議論ができました。興味深かったのは、学生の質問やコメントが、単に読んでいた小説にとど

まらず、なぜ文学を読むか、異なる世代がなぜ村上の小説に魅了され続けているのかなど、より大きな疑問にまで広がり始めている点です。2023年度の5月には、村上の第6作目『ダンス・ダンス・ダンス』(1988年)を取り上げて、このシリーズを終える予定です。最後に皆さんとお話できることを楽しみにしています。（ジョナサン・デイル）

2022年度
教養研究センター主催
読書会 晴読雨読②

アメリカ文学の中の村上
日本文学の中の村上

小説家、村上春樹の作品を取り上げ、アメリカ文学と、日本文学が村上に与えた影響について考察します。日本文化のグローバル化、グローバルな時代における作家が受ける影響を考えながら、日本人作家として、またグローバル作家としての村上春樹を評価したいと思います。是非、ご参加ください。

開催日時：2023年1月17日(火) 14時45分～
案内人：ジョナサン・デイル
【理工学部准教授】

受付：<https://bit.ly/3TDlywA>
※Zoom 開催
★読書会は日本語で開催します★
場所：オンライン(ZOOM) / 対象：学生・慶應義塾教職員

お問い合わせ：toiwasse-tb@redt.keio.ac.jp

アカデミック・スキルズ（水曜クラス）

アカデミック・スキルズが通年で開講されたのは3年ぶりでした。2020年度はコロナ禍で春学期を休講とし、秋学期のみの開講。2021年度は寄付元をなくしたせいで最初から開講せず。2022年度も寄付元はなかったのですが、そこは工夫をして開講。そのあいだに大学のルールがだいぶ変わりました。セメスター制の一段の徹底がはかられ、履修申告が春は春、秋は秋と別々になりました。春のうちに秋も申告して貰い、つないでひっばってゆく「いつもの手」が通じない。履

修者数に関しては3クラスとも苦戦したと言えるかもしれません。春だけで秋は抜けてしまう学生さんも多ければ、なるべく通年という看板を下げていないので、秋だけの履修は敷居が高いのか、新しく入ってくれる人はとても少ない。2023年度の課題です。しかし内容の密度は保てたと考えます。水曜クラスもよく悩んでよく調べてもらえる学生さんが残って、きわめて堅実な成果を揃って出してくれました。やりがいがありました。

（片山杜秀）

アカデミック・スキルズ（木曜クラス）

「帰ってきたアカスキ」ということで、マスク着用以外はコロナ前のスタイルで1年を駆け抜けました。結果、春は登録者22名のうち17名が完走、秋にいきなり6名となるも最後まで残った5名は両コンペで大活躍、金賞や銀賞を受賞という、木曜クラスらしいゴールとなりました。新しい試みとして、相手のテーマについて掘り下げ、自分なりの論文案をプレゼンするというペアワーク「Switch」の導入等がありました。

コロナ禍を経て、教員、TA、履修者とも様々な面で変化があったはずですが、これまで同様、秋になると教室は寂しくなっていました。テーマ設定や時間配分の難しさ、要求水準の高さ等々が原因なのだと思いますが、それ故の上記の結果でもあるはずであり、バランス配分は本当に難しいです。「日吉一のエグ単」、「義務教育ではないのだし...」といった声に甘えず、全員を脱落なく高いレベルへと導く「シン・アカスキ」、実現を目指したいです。

（小林拓也）

アカデミック・スキルズ（金曜クラス）

教員2名による金曜クラスでは、一年を通して受講した学生は2名でした。コロナ禍も3年目に入るなか、すべて対面で、「社会的距離」をとりつつも膝を突き合わせながら議論できたことは、それだけで感動的だったと言えます。春学期と秋学期で合わせて12,000字の論文を完成させることを目標に、授業ではまず「序論」の書き方を検討しました。先達の蓄積を概観し、自論の新しさを訴える。こうした役割をもつ序論は、研究論文の醍醐味を凝縮した箇所です。受講

生は論文を書く難しさと、しかしそれに勝る楽しみとを味わえた様子でした。たとえ研究対象が興味深いものであっても、自分の書く論文そのものが直ちに面白くなるとは限りません。「解説」や「勉強の報告」に終わることなく、いかに論文らしい切り口を見つけられるか。受講生が試行錯誤しながらアイデアを論文に落とし込んでゆく様子は、研究が生まれる瞬間の新鮮な喜びを教員にも与えてくれるものでした。

（中野芳彦）

コンペティション入賞者一覧

■論文コンペティション

賞	クラス	学部・学年	氏名	タイトル
金	木	文・1	佐々木呼子	陸上競技におけるリアクションタイムとトラックの色の関係
金	金	理工・1	松田 芽衣	2015年「文系学部廃止」報道における主要紙の論調から見る国立大学の役割
銀	木	商・1	原 詩風	北九州フィルムコミッションの成功の背景 —「不可能を可能にする地」はどのように実現されたのか—
佳作	木	経済・2	占部愛依理	2.5次元ミュージカルにおける広報—マーチャントの重要性の検証—
佳作	水	法・1	柿沼 歩夢	戦中戦後における学生新聞における表現の推移と連続性
佳作	水	法・1	松山 弓純	嘉手納基地と三沢基地を対象とした抗議行動の発生件数における特有の要因
佳作	水	商・1	小甲慎之助	田井基文『どうぶつのくに』の考察—動物園の〈教育〉〈レクリエーション〉の役割の観点から—

■プレゼンテーションコンペティション

賞	クラス	学部・学年	氏名	タイトル
金	木	文・1	佐々木呼子	スポーツと心理学—陸上競技場のターゲットに関する提案—
銀	木	商・1	黒木 唯花	『ファンタジア』と『ファンタジア2000』の映像と音楽の比較・考察
銀	木	商・1	原 詩風	北九州フィルムコミッション成功の背景 —「不可能を可能とする地」はどのように実現されたのか—
銀	金	商・1	松村 百花	日本の官公庁におけるナッジ政策の現状
銀	水	法・2	平野慎太郎	駒沢練兵場と周辺農業形態の変化
佳作	水	文・1	井川華緒理	木造率の増加と建築基準法改正との関係
佳作	水	商・1	小甲慎之助	田井基文『どうぶつのくに』の考察—動物園の〈教育〉〈レクリエーション〉の役割の観点から—
佳作	水	理工・1	中山 翔琉	旧軍人の人脈が防衛産業に与えた影響とは

※学年は受賞時

教養研究センター設置科目



身体知・音楽

寄附講座として開講している教養研究センター設置科目「身体知・音楽」は、株式会社白寿生科学研究所からのサポートが、2022年度で終了することになりました（2023年度以降の冠スポンサーについては未定）。そのような中、新型コロナウイルス感染症拡大の影響がまだ見られましたが、COVID-19以前の状況にかなり近い形で授業を実施することができました。開講された2つのクラスはこれまで同様、一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」です。後者においては、発声を伴うため、感染症拡大防止策を十分に考慮する必要があり、換気の優れた大教室を使用しながら、履修人数をある程

度制限するなどの工夫を行いました。それでも、外部講師によるヴォイストレーニングも復活させるなど、できるだけ通常期に戻す努力をしました。そして今年度はさらに、新しい試みとして、器楽クラスとの合同で一つの作品に取り組み、その結果を演奏会という形で発表することができました。器楽クラスにおいては、声楽クラスとの合同演奏会とは別に、これまで通り、室内楽編成の小グループによる演奏会と、履修者全員が参加する古楽オーケストラの演奏会をそれぞれ1回催しました。さらには、横浜市の招待により、横浜新市庁舎のアトリウムにおいて、声楽クラスと器楽クラスが合同でコンサートを開きました。（石井明）

生命の教養学

2022年度の「生命の教養学」のテーマは「記憶」でした。このテーマの射程は、ヒトを含む多様な生物における個体ないし集団としての記憶の生理的・心理的メカニズムだけにとどまりません。わたしたちの社会もまた、人間が記憶の管理のために自ら創り出した社会制度やメディア環境（医療、アーカイブ、ビッグデータなど）と、そこから紡がれる「情報」や「歴史」を、その不可欠な基盤としているからです。こうした記憶の両義性——生命の歴史を規定する生物学的条

件であり、人間の生活と生存を左右する重要な文化的要素でもある——を出発点に、魚類心理学から系統分類学へ、さらに神経科学、ケミカルバイオロジー、老年心理学、情報倫理、認知心理学、ダンス研究、ドイツ文化史、フランス文学、哲学・倫理学へと展開された11回の連続講義では、講師と学生による活発な質疑応答がとりわけ印象的でした。コロナ禍の影響を受けて2年越しの実現を見た講義の熱気を肌で感じながら、知の現場を対面で共有することの大切さをあらためて教わった思いです。（西尾宇広）

ゲーム学

ゲーム学はデジタルゲームをアカデミックに考察することを目的とした講座です。オムニバス形式をとっており、デジタルゲームの専門家や塾外から招聘するほか、理系文系を問わず、多様な学問分野の研究者が集う慶應義塾ならではの授業展開を特色として掲げています。このコンセプトのもと、各講師のみなさまは今期、自身の専門領域の知見を活かし、デジタルゲームについて熱く論じてくださいました。また、ゲーム好きと、ゲームを考えることは異なり、その峻別を学生にしてもらえるかが不安材料としてありましたが、ほとんどの履修者がコンスタントに出席して興味関心を維持し、学期末の授業アンケートでは約7割の学生から「とても興味深

かった」との回答がありました。今後、義塾が漫画、アニメ、ポップミュージックなど、いわゆるサブカルチャーとして括られる分野についての研究、教育活動をどのようにおこなっていくかは大きな課題です。これに関連し、昨年12月には三田キャンパスにて「慶應義塾大学エンターテインメント三講座合同シンポジウム エンタメ学宣言！」を開催し、議論を深めました。この問題とも向き合いながら、来期ゲーム学の準備を進めたいと考えています。（新島進）



実験授業「スポーツ・インテグリティ」

慶應義塾体育会は日本の学生スポーツの先駆者として1891年から活動が続けられてきました。しかしながら、社会の規範や価値観が変化していく中で、昨今の体育会も柔軟に変化していく姿勢が求められるようになってきました。そのような中で、もう一度、体育会部員を塾生の規範とし、彼らが誇りを持って活動できるような環境を整えるべく実施されたのが実験授業「スポーツ・インテグリティ」です。これは体育会に対して同様の問題意識を持たれていた慶應義塾体育会出身の篤志家の方による体育会指定寄付を原資とさせていただ

くことで実現しました。インテグリティとは一般に「誠実、真摯、高潔」を意味しますが、慶應義塾のスポーツ・インテグリティは義塾の基本理念「気品の泉源、智徳の模範」に置き換えられます。義塾の理念から始まり、スポーツ、スポーツ医学、スポーツサイエンスに至るすべての英知を結集した講義を、それぞれを専門とする先生方に行っていただきました。このことは、学生自身が義塾でスポーツを行うことの価値や意義を再確認し、その経験をどのように社会に還元していくべきなのかを考えていく契機となったと考えています。（坂井利彰）

「創造力とコミュニティ」研究会

「創造力とコミュニティ」研究会では、2022年度は以下の研究会を開催しました。

2022年7月12日 第14回「伝統文化の舞台から世界を考える」
講師：花崎杜季女氏

2022年8月23日 第15回「土に触れ、空気に触れ、人と繋がる」
講師：原田朋子氏

2022年11月15日 第16回「命をいただくということ～そして私は猟師になった～」講師：保莉優雅氏

2022年12月20日 第17回「私の怒りと向き合う～認め、対峙し、表現する～」講師：手塚千鶴子氏

2023年2月14日 第18回「作り手と受け手をつなぐ『テーブル』」

講師：任意団体「虹色畑クラブ」代表と参加者のサポーター

2023年3月14日 第19回「祈りの場をひらく」
講師：小菅隼人氏

1) ウクライナにおける戦争と日本の芸術

第14回目の研究会では、ウクライナ近隣のポーランド、リトアニアにおいてリトアニアの民話をもとに日本舞踊を

作り上げたアーティストのお話を伺い、芸術の世界からみたウクライナ情勢について語っていただきました。

2) 目に見える消費と新たなコミュニティの創設

第15回では、生きにくさを感じている若者とそのサポーターたちとともに日吉近郊で畑の活動を行い、安全な食材を子供食堂などに届けている団体のお話をうかがいました。また第16回では、ひきこもりだった青年が、伊豆で猟師の資格を取り、現地のコミュニティづくりに大きくかかわっている様子を伺い、第18回では第15回で紹介した畑の食材を使って居場所の運営を行うカドバヤの例を紹介しました。

3) 他者とのつながり

第17回では手塚千鶴子氏を招いて、自分の内面を見つめたうえで、正しい自己表現のもとに他者とつながることの重要性について、参加者とともに語り合いました。また第19回目では、COVID-19により、教会の門戸が閉ざされたときに、自宅を祈りの場として開いた小菅隼人氏を講師としてお招きしました。

どの会も慶應の学生たちが多数参加し、活発な意見交換が行われました。今後はここでの知見を授業でも生かしていく予定です。
(横山千晶)

日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画

国民文化のなかのタイ舞踊—講演、実演、体験—

【講演】平田晶子 (ひらた あきこ)

【実演】チェンマイ大学ランナー舞踊研究会
OB&OG

【司会】伏見岳志

【日時・場所】2023年1月17日(火) 17時～19時20分
日吉キャンパス来往舎大会議室

「タイ舞踊」は、東南アジアのタイで宮廷の庇護のもとに発達してきた芸能です。本企画では、この舞踊のエッセンスを学ぶことを目指しました。講演者の平田晶子さんは、タイおよびラオスの音楽や舞踊をはじめとする表現活動を調査する文化人類学者です。2020年度から日吉開講の総合教育科目「地域研究—東南アジア」で講義を分担し、そのなかで舞踊や音楽の実演もしていただいています。今回の企画は、このぜひいたく講義を、履修者以外の人びとにも

公開することを意図しました。

当日は、平田さんによる舞踊の形成史や基本所作の解説にはじまり、チェンマイ大学でランナー舞踊研究会に所属していたみなさんによる実演、さらに参加者が実際にタイ舞踊の基本所作を体験する、という具合に進みました。寒い日でしたが、参加者のみなさんも実際に体を動かすことで、上気していました。その後の質疑応答もたいへん活発でした。

イベントを通じて明らかになったのは、タイ舞踊には型があり、これが各地方に伝わる武術などとつながっていることです。というよりも、舞踊と武術は一体と考えたほうがよさそうです。武術ならぬ舞術？ この視点は各地の身体技法を考える際の重要な手がかりとなるかもしれません。
(伏見岳志)



笠井叡舞踏公演

1994年から続く新入生歓迎舞踏公演は、教養研究センター日吉行事企画委員会 (HAPP) とアート・センターの共催行事として実施されました。出演は、一昨年、昨年に続き、笠井叡および大使館です。今回の舞踏公演は、新型コロナウイルス感染症対策のため、50名塾生限定の公演となりましたが、観客には15名の塾高生も来場して、「教養の一貫教育」としても大きな意味を持ちました。また、講演後には、鑑賞の手がかりとなるように、笠井叡と小菅隼人との20分弱の対談を実施しました。

笠井氏は、来往舎の巨大の空間の中で、今年が傘寿という年齢を感じさせないダイナミックな動きを見せてくださいました。教養研究センターの教育研究活動にとって大き

な成果になったと思います。タイトルは『今、ショパンを踊る』です。2022年2月24日から始まったウクライナ戦争を踏まえて、パリで活躍しながらも故国ポーランドへの思いを捨てなかったショパンと現在の状況を重ねるような踊りでした。言葉を交えながら、白い衣装といくつかの帽子によって場面の変化を表現していました。その踊りを通して、私たちが、ウクライナ戦争、コロナ禍という絶望的に見える状況をどのように乗り越えるのか、対談を含めて、一つの手がかりを与えてくれたように思います。

(小菅隼人)



情報の教養学（2022年度秋学期）

2022年度秋学期の「情報の教養学」では、3件の講演を対面で実施しました。

まず、栗原聡氏（理工学部教授）は、AIを概観した後、AIと人間の関係について言及しました。人間は熟考が得意である反面、直感的に判断し、必ずしも合理的に判断しません。そのためAIが作り出す情報の世界では、熟考するためのコンテキストがないことがあり、人間とAIが共生できることが今後必要になると述べました。

次に、安宅和人氏（環境情報学部教授・Zホールディングス（株）シニアストラテジスト）は、データリテラシーについて講演されました。情報が大量にある現在、事実（データ）をとってくる能力およびそれを正しく解釈する能力の必要性を説きました。また、データの指数関数的な変化に注意することも重要であると述べました。

最後に、満倉靖恵氏（理工学部教授）は、データに関する話をされました。センサなどでデータを取得すると、ど



うしてもノイズが含まれてしまいます。そのノイズが入ったままデータを処理すると、どんな優秀なアルゴリズムであっても意味のない結果となります。また、AIを用いてデータを処理したときの問題についても述べました。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。2023年度も、講演を春・秋3件ずつ開催する予定です。

（高田眞吾）

研究の現場から

第35回「オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』と革命の世界文学：ヨーロッパ・ソ連・中国」（2022年12月14日（水）ZOOM開催）

ニコライ・オストロフスキーの小説『鋼鉄はいかに鍛えられたか』（1932-34年）は、パーヴェル・コルチャーギンという若者が、革命と内戦、戦後の社会主義建設の中で、自分の身体を犠牲にしながら鋼鉄のような精神を鍛え上げる物語です。半身不随になり、視力まで失うほどの肉体的な損傷はグロテスクでさえありますが、そのヒロイックな自己犠牲は若い読者を感動させる力を持っていました。ソ連の社会主義リアリズムの模範的な作品とみなされて多言語に翻訳され、共産圏の国々はもちろん、「西側」の左翼の読者にも熱心に読まれた時期がありました。とりわけ中国での影響力は大きく、現代でも大学生の愛読書のひとつとして必ず名前が挙がるほどの人気があります。かつて

のような特権的な位置づけを失い、あまり読まれなくなっているソ連解体後のロシアとは対照的です。

社会主義体制下の中国においてオストロフスキーの小説は、青年の読書にふさわしい作品として大部数で刊行され、学校の教育に取り入れられました。しかし公的な領域での積極的な導入だけでは、これほどの人気は説明できません。中国の読者は、そのブルジョア的な身振りや性格から否定的な人物像とされている少女トーニャと主人公の失敗に終わる恋愛に深く感情移入したようです。そのことはウクライナで現地の俳優を使って撮影された中国のテレビドラマ版の『鋼鉄はいかに鍛えられたか』（1999年）で、トーニャに原作を越えた重要な役割が与えられていることから分かります。ソ連のイデオロギー小説が、ヨーロッパ風のロマンチックな恋愛という想定外の意味をもたらしたわけです。

（越野 剛）

予告 「研究の現場から」（第36回）

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、参加者とくだけた雰囲気なかで語り合う催しです。慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所であるとともに、情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイデアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。

（高橋宣也）

- 日 時：5月22日（月）18：15～20：00（予定）（ZOOM開催）
- 講 師：浜田 和範（法学部）
- タイトル：ファン・ホセ・サエール『グロサ』を読む——語り手と読者の関係から
- 申込み：要
- 参加費：無料

※過去の催しはこちらからご覧ください

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php>

【全体ガイダンス】(オンデマンド配信)
4月1日(土)～4月14日(金)
【「学び場」プロジェクト】
4月17日(月)～7月21日(金)
日吉図書館1階スタディサポート

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第1回
4月28日(金)17:00～19:00 オンライン開催

【みなさんmiraiプロジェクト】公開シンポジウム
5月15日(月)18:15～20:15
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】ライブラリーコンサート2023
5月17日(水)5月19日(金)15:00～
日吉図書館1階ラウンジ

【学会・ワークショップ等開催支援】
第7回総合危機管理学会学術大会
5月20日(土)9:00～17:00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【研究の現場から】第36回:浜田和範「ファン・ホセ・サ
エール『グロサ』を読む—語り手と読者の関係から—」
5月22日(月)18:15～20:00(予定)
オンライン開催

【HAPP】新入生歓迎行事「上杉満代舞踏公演『命』」
5月24日(水)18:00～
日吉キャンパス来往舎イベントテラス

【基盤研究】教養研究講演会 no.8:船戸良隆「激動の流れを生きる—
ウクライナ戦争を念頭に、今ベトナム戦争を考える—」
6月9日(金)16:30～18:30
日吉キャンパス来往舎大会議室

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第3回
7月14日(金)17:00～19:00
日吉キャンパス来往舎小会議室

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第5回
10月7日(土)時間未定 日吉キャンパス来往舎中会議室

4月

5月

6月

7月

8月

10月

【情報の教養学】第1回:福井健策
「進化するAIと変わる著作権・肖像権」
4月19日(水)16:30～18:00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【読書会】「晴読雨読」第6回:ジョナサン・ディル
5月10日(水)14:45～16:15
オンライン開催

【学会・ワークショップ等開催支援】「日吉キャン
パスバヴィリオン誕生とこれから」
5月10日(水)18:15～20:30
日吉キャンパス来往舎大会議室

【HAPP】新入生歓迎行事「鎌倉大仏の学際的調
査・研究」
5月20日(土)14:00～15:30
日吉キャンパス来往舎大会議室

【学会・ワークショップ等開催支援】公開シンポジ
ウム「北朝鮮とベトナム」
6月1日(木)17:15～19:00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第2回
6月2日(金)17:00～19:00 日吉キャンパス来往舎中会議室

【学会・ワークショップ等開催支援】
手話研究を通してろうコミュニティを考える(仮)
6月3日(土)日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】新入生歓迎行事「コロナを超えて:自己
プロデュース(なりたい自分になるメイク術)」(仮)
日時未定 日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【基盤研究】文理接続プロジェクト 第4回
8月4日(金)17:00～19:00 オンライン開催

庄内セミナー
8月29日(火)～9月1日(金)山形県鶴岡市

【HAPP】新入生歓迎行事 教養の一貫教育Vol.6
「Voix/Voie 吉増剛造 詩と音楽の交差するところ3」
10月中旬(予定)15:15～17:30(予定) 日吉協育ホール

※活動予定は中止・延期・変更となる可能性があります。

※2022年11月発行のNewsletter41号において、吉増剛造氏のお名前表記に誤りがございました。謹んでお詫び申し上げます。訂正いたします。
(誤)吉増剛三 (正)吉増剛造

私のMF自慢

MFとはマイクロフィルムのことで、いつもこれで満洲時代の新聞資料を見ている。本来は放送番組表の調査が目的なのですが、ついつい記事も広告欄も隅々まで読むようになり、対象以外の内容に何時間も費やしてしまいます。輸入価格が高騰し佐賀米を諦めて餅つきに満洲米を使ったという投書、寒さで悪化した喘息に起因する神経衰弱で飛び込み自殺を遂げた二人の子を持つ母の記事、保存状態が悪い終戦前の紙面などを目にしている感覚は、まるでその時空間に吸い込まれていくかのようです。ちなみにフィッシュ、16mmロール、32mmロールといくつかの形態がありますが、32mmが外形質感ともお気に入りです。これらはいずれデータベース化されるでしょう。そうなるときと時間を無駄にせず検索、ダウンロードの次にUSBに入れておしまいという高効率で感情曲線は微動だにしない調査を行うことになるでしょう。機械的に繰り返す作業に苛立ちを覚える可能性さえあるので、やはり少々手間がかかるが味わいと利便性とのバランスを絶妙に保っているMFがいいです。ある日ふと思ったことですが、電気スタンドに照らされるMFリーダーはなんとなくのび太の机にあるタイムマシンに似ていること。マイクロフィルムで時間旅行しているので自慢させてください。(商学部 代珂)

